

だんだんなあ

Vol.5

2015年10月24日発行

発行：人吉球磨地域在宅医療連携拠点事業

これからの在宅医療の重要性について



感謝のこころを持って

錦町 町長 森本完一



私たちの子どもの頃は、家で最期の看取りをすることは珍しいことではなかったように思います。医療の充実によって、自宅で最期を迎える人の割合は減少し病院で亡くなる人が圧倒的に多くなったようです。少子高齢化社会となり高齢者の死亡数が年間100万人を超え、将来的には150万人を超えることが想定されています。病院での死が追いつかないという見込みや終末期のQOL（生活の質）などの観点から、在宅での看取りは国民的な課題となっています。

第6期介護保険事業計画においては、医療と介護の連携が大きなテーマになっています。医療が必要な高齢者や重度の高齢者が在宅で暮らせるための仕組みとして「地域包括ケアシステム」が重要となってきます。これは高齢者が可能な限り住み慣れた地域で、その有する能力に応じて自立した生活を維持できるようにする体制のことです。住み慣れた地域での生活を継続できるよう、退院支援、

日常の療養支援、急変時の対応、看取りなど様々な局面で医療と介護の連携が必要になると思われます。また、生活を支える点では地域の見守りや配食、買い物支援なども多様な生活支援サービスの充実も併せて必要となります。今後、医師会の協力を得つつ市町村は、在宅医療・介護連携のための体制を充実させていく必要があります。推進のためには地域医療に関わる皆さんとの連携が必須であり、医師会で取り組まれている「在宅医療拠点事業」は大変心強く思っております。

住み慣れた地域で自分らしい暮らしを最期まで可能な限り続けることができるよう、医療・介護・介護予防・住まい・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築をめざします。誰もが自然と「どぎゃんな」と声をかけあい、「だんだんなあ」と感謝のこころを持ってこたえることができるような支えあいのやさしいまちになることを願っています。



報告

あたたかいのちのつなぎ
～見取りの現場に思う～

國森康弘氏講演会報告

平成27年度の当事業の第1弾である「在宅医療を考える」講演会が7月29日午後7時より、人吉カルチャーパレスで開かれ、写真家の國森康弘さんを講師に、「あたたかいのちのつなぎ ～看取りの現場に思う」と題した内容で在宅での「看取り」を考えました。

國森さんは神戸新聞社記者を経てイラク戦争を機に独立。紛争地域や東日本大震災被災者たちの取材を重ねて



こられました。近年では滋賀県東近江市を中心に看取りや在宅医療の撮影に力を入れておられます。この講演会では、写真絵本シリーズ『いのちつぐ「みとりびと」』（農文協）で

使われた写真を見ながら、生と死に関するお話をされました。

おばあちゃんの看取りを体験した少女が「今まで大事にしてくれてありがとう」とお礼

を言うエピソードや、亡くなったおばあちゃんの目から涙で出ていた話などを紹介され、「人間はいただいた命を大切に生きて切り、感謝しながら命のバトンリレーをするものではないか」と話されました。





特集

どのように最期を迎えるか

寝たきりにならない努力を

あさぎり町 町長 愛甲 一典



私は、父母をはじめ家族の最期に立ち会ったことがありません。人生の最期という言葉で思い浮かべるのは、高校一年生の時に曾祖母が亡くなった事です。曾祖母は明治維新の少し前に生まれ、明治、大正、昭和と生き抜いて来ました。私が物心ついた頃から家の周りの草取りが日課で、天気の良い時はいつもタオルを姉さんかぶりし、古着を使った自作の火縄の煙で蚊よけをしながら草取りをしていました。

その曾祖母は88歳で亡くなりました。亡くなる直前まで曲がった腰で、いつもの様に家の周りの道端で草取りをしていました。体調を崩し寝込んだのは1週間、ほとんど家族に迷惑をかけることなく、ろうそくが燃え尽きて炎が静かに消えていく、その様な最期でした。高齢になっても大きな病気をすることなく、すばらしい人生の終わりであったと思っています。

私もこの様な人生の幕引きを望みます。寝込んで下の世

話をしてもらおうようになりたくない。寝込んで自分の意思を伝えることができなくなったら、延命治療はしないように家族に伝えておこうと思っております。そのためには意識して健康を維持する努力を続けること。1年半前からラジオ体操第一、第二を実行し、2カ月前から30分のジョギングを2日に1回行っています。斜め腕立て伏せや足の屈伸に加え、運動後に牛乳を飲むと筋肉がつくとテレビ放映を見てからこれを実行しています。成果として、ラジオ体操では4カ月でつま先の踏ん張りが強くなりました。ジョギングでは、高めであった血圧が2カ月で少し下がってきています。これから寒くなりますが、今後も成果を楽しみに冬もジョギングを続けるつもりです。

高齢になっても家族に迷惑をかけないこと。健康面、経済面ともに自活できること。この思いは皆の共通の願いであります。両方とも実現できれば最高ですが、少なくともトイレには自分で行けるくらいの基礎体力の維持を目標とし、足腰の衰えを防ぐ努力をして行きましょう。



在宅介護体験記

父の逝きかた

人吉市 長濱裕子さん

昨年一月、父はベッドから簡易トイレに移動するときに転んで腰を痛め、とうとう寝たきりの生活になりました。そのとき八十九歳、弱っていく父の姿を見て、私は「もうだめかも」と内心覚悟をしました。が、そんな私の顔を見て父が「まだ死にたくない。生きたい」とはつきり言ったのです。

それまでも父と母はずっと二人で助け合って頑張ってきました。できれば最後までこのまま、この家で…。でもできるのだろうか：と私たち家族は何もかも不安でした。そんな不安の中、主治医の先生の「自宅で頑張ってみましょう」という言葉に後押しされて、本格的な在宅介護生活が始まったのです。

とはいえ高齢の母に父の介護は無理です。私や姉も同居しているわけではないので、介護に関してはほとんど「丸投げ」の状態でした。朝、昼、晩とヘルパーさんに来てもらって、食事もおむつも全てお願いしました。週一回のデイサービスではお風呂に入れてもらいま

した。何か不安なことがあればすぐにケアマネさんや訪問看護師さんに相談して、適切に対処していただきました。母もこまごまとしたことをやるだけ頑張っていました。が、父にとっては母がただ側にいてくれるだけで安心だったようです。

そんな生活の中で、父は食欲を取り戻し、よくしゃべり、よく笑い、お世話をしてくる全ての方々にいつも「ありがとう」と言っておりました。

父は父らしい人間味を最後まで保つことができたのです。それは皆様が父に対して「人としての尊厳」をいつも大切に下さったからこそのことだと思います。

寝たきりになってから一年三ヶ月経った今年の四月、九十歳の父は自宅の庭の見える部屋で、静かに息を引き取りました。

言葉では言い尽くせませんが、皆々様に心より感謝申し上げます。



平成 27 年度第 4 回球磨圏域介護支援専門員研修会

球磨人吉在宅ドクターネットの協力により在宅医療連携拠点事業の一環として、人吉医療センター外科医師兼緩和在宅医療センター長の西村卓祐先生にお願いし、人吉医療センターにて開催しました。約 100 名の参加で会員のほか、多職種の方々の姿も見られました。

今回のテーマは「がん患者への対応」と、私たちには、身近な病気ではありますが、在宅でのがん患者との関わりはまだまだ少なく、その対応が十分とは言えません。また医療知識が充実でない福祉系の介護支援専門員にとりタイムリーなテーマであると考え、在宅ドクターネットに相談・企画しました。

西村先生の優しい語り口のおかげでしょうか、がんに関しての基本的な知識からその治療の方法や考え方が、すくすくと頭の中に入り込んできました。これまでのがんに対するイメージも変わりました。西村先生の「がんになっても、考える時間と行動できる時間がある」というお言葉には、確かに腑に落ちるものがありました。

在宅医療が進む中、介護支援専門員を始めとする多職種が、まずはがんのことについてしっかりと知識を持ち、連携しあうことが、がん患者の方やその家族を支えていくこととなり、ひいては看取り介護に行きつくことになろうかと考えます。一人でも多くのがん患者の方が、その方自身が望む生

活を最後まで送ることを支援できる専門職員が育っていくことが望まれます。

今回のアンケートで、「地域の在宅ケアは職種を超えて地域のチームで支えていく」という先生のメッセージに感動したと答えた会員が多数おりました。先生の講義に共感を得た証しだと思います。西村先生の今後益々のご活躍を祈念し、かつ引き続き球磨人吉在宅ドクターネットと連携して研修会を企画していきたいと思ひます。

研修会の後座で参加者の一部で懇親会を行いました。研修会の余韻も手伝い、多職種間での意見交換もできまして研修会と同様、大いに盛り上がりました。こちらも併せて引き続き実施していきたいと思ひました。(笑)

最後に本研修会の開催にあたり、ご協力くださいました球磨人吉ドクターネットの先生方、研修会場を提供くださいました人吉医療センターの職員の皆様には本当にお世話になりました。ご協力に感謝申し上げます。この場をお借りしまして厚く御礼を申し上げます。(尾方洋平)



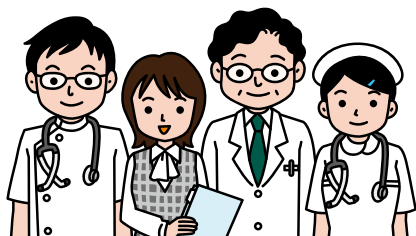
上球磨地域での在宅医療介護連携の取り組み

多良木町・湯前町・水上村では、県の在宅医療介護連携推進モデル事業に取り組んでいます。

この事業は、県内の5つの市町村(地域)をモデル地区に選定し、それぞれの地域に合った医療と介護の連携体制構築を目的としたものです。

昨年度は、医療と介護の現状を把握するため地域の医師会の先生方や介護支援専門員を対象にアンケート調査を行いました。

その中で、医師会の先生方から担当の介護支援専門員が分からない。連絡先が分からないとの回答が多く寄せられました。一方、介護支援専門員からは、医療機関に対し敷居が高く感じられたり、医療面での知識不足により連絡することに抵抗がある、などの回答が多く寄せられ、連携する上での課題が浮かび上がりました。



そこで昨年度は、これらの課題を解決するため地域の医療・介護・行政が一堂に会する研修会や懇親会を企画し「顔

の見える関係」を築けるように努めました。

医師会の先生からは「このように顔を合わせる会を重ねていくことが、連携を深める早道である」、介護支援専門員からは「先生方と話をする機会を持つことができ、今後に繋がる」との言葉を頂きました。

今年度は、介護支援専門員が利用者様を担当することになった時点で、先生方に担当者であることを通知する「連携ツール」の作成を地域の医師会や介護支援専門員へ相談しながら進めたいと考えています。

以前、医師会の先生から「医師(医療)と介護支援専門員(介護)は、車の両輪のような存在であるべきだが、これまでは片方の車輪だけで進もうとしてきた。これでは上手く進まない」と伺ったことがあります。

医療・介護の両輪を同じ方向に向かって進めるためには、両者が日ごろから顔を合わせて連携する機会を多く持ち情報を交換すること、そして在宅医療介護連携推進事業の実施主体である市町村が両輪の進むべき方向性を明確に提示し、しっかりとハンドルを握ってもらうことが大事であるとこの事業を通して学ばせて頂きました。

日本医療マネジメント学会「第14回九州・山口連合大会」へ寄せて



会長：木村 正美（人吉医療センター院長）

この度、日本医療マネジメント学会「第14回九州・山口連合大会」を11月20日（金）と21日（土）の両日に、人吉市の人吉市カルチャーパレス・人吉スポーツパレスを会場に開催することとなりました。熊本県での開催は、第2回の木村圭志会長以来2回目となりますが、今回は熊本市から離れて人吉市での開催となります。地方の県庁所在地を除けば、医師・看護師不足、人口減少、少子高齢化が進み自治体の存続が危ぶまれている声も聞かれます。国レベルでも東京一極集中から地方再生・地方創生の取り組みが始まっています。

住民が安心して暮らせる地域を子供たちに残していくことはわれわれの重要な課題であるため、今回のテーマを「次代につなぐコミュニティヘルスケア～今、われわれは地域のために何をすべきか～」としました。

都市部、農村部、中間部とさまざまな地域があり、抱えている問題も異なりますが、田舎も都会もどちらも共存し暮らしやすい地方が存続するために共通した認識でこの問題に取り組む必要があります。地域医療と福祉介護の連携・地域包括ケア・総合医の育成など目前に迫っている地域としての取り組みについて議論していただこうと思っています。

関連する諸問題についても教育講演など予定しています。また、当学会の重点課題であるクリティカルパス、医療の質、医療安全、地域医療連携に加え、チーム医療、DPC、ICT、感染対策、救急医療、医療経営など幅広いテーマで活発に情報交換していただきたいと考えています。本学会は、医師、看

護師、医療スタッフ、事務・管理部門などすべての医療系スタッフのみならず介護や行政の関係者のみなさまにもご参加いただき活発な議論をしていただき未来の扉を開ける鍵となっただきたいと期待しています。

晩秋の人吉は、紅葉が見ごろで秋の収穫期でもあり観光シーズン真っ盛りです。人吉・球磨盆地の神社仏閣、温泉、川下り、焼酎、また、近隣の五木・五家荘、えびの・霧島など南九州中央ハイランドを十分お楽しみいただきたいと思います。

「田舎もいいよね」と言っていただけのような心からのおもてなしを用意してみなさまのお越しをお待ちしております。

11月21日に「市民公開講座」



医療マネジメント学会第14回九州・山口連合大会にちなんだ地域医療を考える市民公開講座が21日（土）、午後1時30分からカルチャーパレス大ホールで開催されます。

慶應義塾大学名誉教授の田中滋氏、日本尊厳死協会元副理事長の松根敦子氏、自治医科大学地域医療学臨床教授の中村伸一氏らによる講演とシンポジウムで、次世代の地域医療について考える講演会です。多数の参加をお待ちしております。

お知らせ

当事業の公式ホームページをご活用ください。



「だんだんなぁネット」では、在宅医療に関する情報や本事業の活動を紹介します。「施設検索」「外部リンク集」などを掲載し、情報誌「だんだんなぁ」のダウンロードも可能となっています。PC・

スマートフォン対応ですので、是非アクセスしてみてください。

<http://www.dandanna.net/>

編集・発行

人吉球磨地域在宅医療連携拠点事業 事務局

〒868-0037 熊本県球磨郡多良木町多良木 3051

球磨郡医師会内 ☎ 0966-42-4797

E-mail kumadr@bronze.ocn.ne.jp

映画「スクール・オブ・ナーシング」特別上映会



人吉市を中心に九州各地で撮影され今秋、全国公開を目指している映画「スクール・オブ・ナーシング」の特別上映会が8月に人吉市と伊佐市で行われましたが、見逃した方のための再上映会が「医療マネジメント学会第14回九州・山口連合大会」のプログラムの一環として、11月20日に行われます。

この映画は看護の難しさや、そこから得られる喜びを描いており、人吉医療センターも全面的に協力した作品です。ほかに日本看護協会、日本医師会、人吉市医師会、球磨郡医師会などが後援しています。是非ご覧ください。

【日時】11月20日（金）18:30～

【会場】人吉市カルチャーパレス

【チケット（前売り・当日共通）】

大人（中学生以上）1,000円、小人（小学生以下）500円
人吉温泉観光協会（MOZOCAステーション内）、きじ馬スタンプ協同組合、ひとよし森のホールにて発売中です。